
王国物語

三沢緋夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王国物語

【Zコード】

N5126A

【作者名】

三沢緋夏

【あらすじ】

さあ旅に出よう。大切な仲間と一緒に、破滅をもたらすモノを倒すために！

第0章～プロローグ～（前書き）

決して不良とかヤンキーとかの話じゃないです。

第0章／プロローグ／

和国。

春になれば桜の花が満開に開き、小鳥が鈴のような声で囀る国。夏になれば強い光が大地に刺さり、蝉時雨が懐かしく聞こえる国。秋になると山の木々は綺麗に色づき、口々口々と虫が囀る国。冬になると白い雪が空を舞い、キシツと雪の上を歩く音がする国。和国つてそんなところ。

ある世界の、ある惑星の、ある国にも似ていると噂されるが、どこの国なのかは誰も知らない。その国には法律があるらしいがそんなものこの国、いや世界にはない。聞いたこともない。

和国つてそんなところ。

それはともかく。

この状況は何だらう。

「最近調子こじてるのはてめえかコワ」

屈強なヤンキー数人が、コンビニの裏で俺を囲んでいる。モヒカンだったりリーゼントだったりのそいつらの手にはスタンガンだとか竹刀だとか木刀だとかナイフだとか。

そこで俺の手には缶ビールの入ったコンビニの袋。

「ちいとばっかし俺よりいい顔だからってデカイ顔してんじゃねえぞ」

この世の終わりを迎えたときに悪魔が見せるような顔してるやつにちいとばっかしだと言われたくない。そして俺の顔はおぼんみたいに丸くてデカイお前の顔よりは小さく。

「何とか言えよゴルア」

そのこり用語は何だよ。ゴルアはねえだろゴルアは。

黙つたままの俺が気に食わないのか知らないが、屈強なヤンキーたちはそれそれで田を見合わせると、円の中心にいる俺に四方八方から突っ込んできた。

「死ねえええっ！！」

右足を軸足にして左にターン。そのまま突っ込んでくるヤンキーの1人のこめかみに思いつきりテロップインをする。

「ぎにょえあああ」

奇声をあげながらそいつは地面に転がる。それに気をとられた木刀を持つていた男の手を、左のつま先で蹴つ飛ばす。はすみで落とした木刀を手に、俺は跳んだ。

俺は昔からジャンプ力が凄いと言われる。普通にそのへんにある1・5Mの堀なら簡単に飛び越えられる。当たり前だが手を使ってとにかく跳躍力なら誰にも負けない。

それは俺の自慢にもなるし、こいつときは便利だ。

たとえばホラ。

木刀を片手に跳んだ俺に、ほかのヤンキーたちは一瞬怯んだ。

一瞬でいい。一瞬怯めばこっちのもんだ。

そのまま後ろ斜め45度。俺は勢いをつけて思いつきり木刀を投げた。

それは宙を一直線に突き進み、やがてゴズッという鈍い音を出してから地面に落ちた。

ゴズッという鈍い音は、ナイフを持っていたヤンキーの顎と木刀とがぶつかる音だった。

俺が着地すると同時に、先のヤンキーは血を流して倒れる。

「う、うわあああああああ」

恐怖に満ちたほかのヤンキーの悲鳴があたりを包み込む。

・・・耳障りだ。

血のついた木刀を拾つて、俺は再び構えた。
と、そのときだった。

「 こりらーつー営業妨害だ畜生どもが つー」

コンビニの店長らしき男が怒鳴りながら乱入してきた。その右手には黒光りする拳銃。

「 ・・・こりややべつかな」

構えていた体制を逃げる体制に変えて、俺は木刀を投げ捨てた。力ランカラーンと、地面に落ちるそれの音を背に、俺は家の方向に向かつて走り出した。

「 あつ畜生。てめえせめて名乗つてからいけつ」

倒れたヤンキーをかづぎながらほかのヤンキーどもが叫ぶ。
そいつらを見ずに。

聞こえるか聞こえないかの声で、
にやつと笑つて俺は答えた。

「 白井良太しらい りょうたってんだ。覚えとけ」

後ろから銃のなる音がしたけどそんなこと俺は知らない。
朧月が闇夜を照らした。

第〇章～プロローグ～（後書き）

王国物語プロローグ、どうでしたか？

この話はワードで作っているものを引っ越し詳しくしたものです。
ぶつけやけ長いです。

それでも興味をもたれた方は、どうぞ最後までお付き合ください。
あなたさえよければまた。三沢でした。

第1章～住処～（前書き）

20歳未満の飲酒は法律で禁止されています。

第1章／住処

あけた瞬間泡が飛び出る可能性100%。

そんな缶ビールを意を決してあけて、予想通り吹き出た泡を処理して口に含む。

1人では少し広いこの部屋に住み着いてからもう3年半だ。
親父と母さんと姉貴1人を飛行機墜落事故で失つてからもう3年たつ。月日が流れるのは早いな。と年寄りくさいことも思つてみたりする。

16歳だった。

あのころは何かと気に食わないことばっかで。

1人で部屋借りて。

もう1人の姉貴、曙姉はあけみデザイナーになるために寮に入つて。

そんな俺らに会いに来る途中で。

パイロットの操作ミスで。

何百人の死者の出る事故で。

家族をいつぺんに3人も失つた。

そうして3年たつて。

居心地の悪かつたこの部屋にもだいぶ慣れた。今じゃ毎日喧嘩三昧だ。

「ピーンポーン」

夜中の2時過ぎにもかかわらず鳴り響いたドアベル。何故かこのアパートのドアベルは音が大きくて近所迷惑もいいところだ。まあ、大して人がいるわけでもないが。

ビールを置いて、ドアをそろりと開ける。

「りょーたつ。あつそぼー」

「水色・・・・・」

空色の髪を長く後ろに垂らして、瞳は輝くエメラルド。それはぽつかりあいた穴のようで、今は嬉しそうに細められている。
身体はしつかりしているがマッシュ・・・ってほどでもない。
そして最大の特徴は家柄だ。

佐倉グループの1人息子であるため金はもちろん権力も凄い。本人に後を継ぐつもりはないらしいが。

太い、力強い腕に白くて細い腕をからめているのは彼の配偶者であり町を歩けば誰もが振り返るほどの美貌をもつ鈴音だ。

光に照らされた大地の色の髪を耳の横で一つにまとめている。

黒いまつ毛は扇のようで、その瞳は灰緑のビー玉だ。

秋に実る果実のように赤く、マッシュマロのようにふっくらした唇の両端を上にあげている。

「つづーかお前らさあ、時間帯考えろつづーの」

彼らの脳内辞書に遠慮とか配慮とかそういう言葉がないのは知っているがいくらなんでも常識ぐらいはあってもいいだろう。水色はともかく鈴音ぐらいには。

「だつてこの時間じやなきや遊べないじゃーん。今から夏澄たちも誘いにいくんだ。良太もくるでしょ?」

くるでしょくるよなつていうかこないとてめえ権力使って殺すぞ口的オーラがにこやかな水色の顔からうかがえる。

俺はため息をついて家を出た。

空には銀の数多の星。

第1章～住処～（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
今回は主要キャラ紹介前編つてことで・・・
次回は残り2人の紹介とある事件が。
あなたさえよければまた。三沢でした。

第2章～歩～（前書き）

今章まで紹介となります。

第2章～歩～

深夜の古ぼけた商店街は、人どころか灯りすらもない。真つ暗の中を、月明かりだけで俺と水色たち計5人は並んで歩く。

数分前

「お前らなあ・・・今何時だと思つてんだよ」

光と草原の草を混ぜて色をつけたような草色の髪を1つにまとめて後ろにたらしている佐祐^{さすけ}は、腕を組んで笑みを浮かべた。

笑みを浮かべているがそれは嬉しい、という感情とは別もののだ。その証拠に額にはうっすら浮かび上がっている青筋。髪と同じ色の瞳には、にこにこ笑っている水色と鈴音と苦笑いを浮かべている俺の姿が映っている。

「もー良ちゃんと同じこと言つ つー！」

頬を膨らませて鈴音が佐祐を上田でにらむ。それを見下ろすように佐祐も鈴音を見る。

こんなこと考えている場合じゃないとも思うが、この2人が一緒にいるところだけ神秘のベールに包まれているような感じがする。

鈴音同様佐祐も綺麗な容姿をしているし、長い髪の手入れは欠かさない。今はため息を出しているその口から発せられる声は、低くよく通る澄んだ声だ。

「つてか常識つてもんをなあ・・・」

「何やつてんのよあんたら・・・」

ふいに佐祐の後ろから佐祐のより若干高い声が響いた。

「あ、夏澄ちゃんやつほー。あつそぼー」

闇夜に映えるオレンジ色の髪を佐祐のより高く結い、灰空色の皿は

今は呆れ顔をつくっている。

親父たちが死んだ原因である飛行機墜落事故の唯一の生還者であり、野生そのものの生活をしていったこともある。

殺人屋をしていたこともあって、俺らの中で一番黒い過去をもつている奴だ。

「遊ぶつて・・・どこで

「いつもんとこーっ！」

鈴音と水色が声をそろえて言う。それを制するように口元に人差し指を持つていつて、夏澄は靴を履いた。

「別にいいけど。どうせ暇してたとこだし」

佐祐はどうする?と夏澄が佐祐を見上げる。佐祐は少しだけ口を尖らせてから、目をそらせて言った。

「・・・夏澄がいくんなら俺も行く」

というわけで今に至っている。

鈴音は水色とひつついでバカッブル發揮してると、佐祐は夏澄にひつついで離れない。

・・・俺だけ1人ものではないですか。

深夜なので誰も口を開かずに歩くから、風の音が耳に心地よく響く。不ぞろいに聞こえる5人分の足音。

時々雲で月が隠れるたびに

一瞬だけの闇夜が生まれる。

第2章～歩～（後書き）

次章から話が大きく動き出します。

小分けにしてしまつてすいません。次章から気をつけます。
ここまで読んでくださつてありがとうございます。よろしければ次

章もお付き合いください。

あなたさえよければまた。三沢でした。

第3章／やつちまえ／

ねえ良太。

5月18日は良太と私の誕生日だね。

誕生日が一緒。

なんだか、運命みたいだと思わない？

いつものところ。まあただの広場なんだが、大通りから外れているため争いとか喧嘩とかがよくある、俺たち5人のお気に入りの場所だ。

水色と鈴音が足を曲げたり伸ばしたりしている。夏澄が背中の剣を手にして一度振る。佐祐が長く伸びた髪を結いなおす。俺はぱきっと指を鳴らした。

そして5人そろって広場の中心を見据える。

非常識な間に、少女が1人。

そして周りにはそろいの黒服を着た数十人の男。よく見れば女も2人ほど混ざっている。

手には武器として使われるものおそれぞれで持つていて、少しづつ。だが確実に少女のほうに詰め寄っていく。

突然夏澄が 行こう とだけ残して走り出した。

「 夏澄ちゃん！」

あわてて鈴音が後を追う。その後を俺たちも追つた。月が雲で隠れて一瞬だけの闇夜がうまれる。

地面に手をついて大きく身体を反らせる。そしてそのままの勢いで

夏澄は一度に数人の男を蹴つ飛ばす。

「な・・・・・」

突然の攻撃に動きを一瞬止めた男を水色が殴り倒す。

佐祐が腰に手を伸ばし、挿していた剣を引き抜き、軽く振る。

鉄色の刃が月に照らされて鈍く光る。そしてその後を追いつよつて舞う鮮血。

その後ろで鈴音が笑う。

「だ、誰だつ！！」

オールバックの男が叫ぶ。額にはうつすら赤いモノ。手には握り締めた護身用っぽい警棒。

威勢良く叫んだわりには声がひっくり返っている。かすかに身体も震えている。

そりやそうだろう。

いきなり突っ込んできたかと思えば仲間を殴るし蹴るし斬るしそれ見て笑うじじゃあ。

俺だつて泣きたくなるだろ？

泣いてないだけ彼は凄い。

でも俺が同情する間もなく、佐祐が冷たく言い放つ。

「誰だつていーだろーが」

それが合図だつた。

向こうの奴らが反撃をはじめた。

どこにそんなにいたのか、人数はどんどん増えていく。

夏澄が斬る。

水色が蹴つ飛ばす。

佐祐が刻む。

どんなに倒してもどうしてだか数が減らない。

逆に増えているみたいだ。

「つあーもキリがねえつ」

水色が苛立ちの声をあげる。

3人ともどんどん息があがる。

それを見ながら、鈴音が俺のほうを見てくすりと笑った。

「良ちゃんはやんないの？」

やんないの？ああ、あなたは喧嘩しないのか？ってことか。いやだ

つてほら・・・面倒くさいし。

だがそういうわけにもいかないようだった。

ぼーっと見ているだけの俺に向かつて佐祐が叫んだ。

「つおい良太てめつ何一人だけ楽してんだバカ」

それに続くように夏澄も叫ぶ。

「そーだよバカ」

そして水色はこう叫ぶ。

「バーカ」

「そろつてバカバ力言うなつ！」

そう叫んでから、俺は相手が密集している方向に向かつて右手を突き出した。

身体の中心から全身をめぐらせるように気を落ち着かせる。

そしてそれを右手だけに集結。

頭に浮かぶのはこの言葉。

「バンつ」

右手を光源に全身が青白く光る。髪がわずかに浮いた。右手の平には赤く光る小さな魔法陣。その中心から一瞬だけの光線。

そしてその先にいた相手の密集地で突然おこった爆発。

「うわあつ」

「ぎやあつ」

「ぐへつ」

響き渡る奇声・・・ではなく悲鳴。煙で何も見えないが。

風にのつて人間の焼ける匂いがする。

煙が晴れたらたくさんの人間が転がっていた。

餘音せせつめつべく笑ひ。

第3章～やつちまえ～（後書き）

「バン」と「ビックバン」と迷ったけれどこんな雑魚相手に良太が
「ビックバン」なんか使う分けないなーと思つて「バン」にしました。

どうでもいいですね。失礼しました。
感想、評価等いただけると嬉しいです。栄養になります。
貴方さえよければまた。三沢でした。

第4章／誰だつー

ああそうだ。

あいつが俺の名を呼ぶたびに
胸が締め付けられるような
そんな気がしたんだ。

「ま・・・魔法使い・・・」

生き残っていたオールバックの男がへなへなと座り込みながらつぶ
やいた。

動けるのは数人だろう。だが向かってくるものはいない。

改めて魔法の力の大きさに驚く。

「ぼーっと見てるかと思えばいきなり爆破系使いやがって・・・少
しは加減しろよな」

水色が舌打ちをする。

「でもだいぶ数が減ったし、結果オーライでしょ」

夏澄が剣を鞘に收めながら言つ。

チン、という金属音が響いた。

佐祐も剣を鞘に收めながらそれに、と続ける。

「残った奴も歯向かう気ゼロだしな」

見回して水色はうなずいた。

「ちょっとビーするよこれ」

突然甲高い声がその場に響いた。

「どーするもこーするもありませんわ。あんなにいた兵がいっきに
死んでしまってるんですもの。お父様に怒られますわ」

先の声よりやや低い、優しいかんじの声が後をつなげる。

「誰・・・」

声の主を探して暗闇の中を必死で田を凝らした。

やれやれ、とため息をつきながら藪の中から出てきたのは金毛を綺麗に2つにまとめた田つきの悪い女。

そしてその後に続いて闇の中に綺麗に溶け込むような黒い髪を左右でまるめているお嬢様系の女も出てくる。

どちらも背は同じぐらいで、瞳は闇によく映える藤の色。黒い服に身を包み、足取りは軽い。

「で、どーすんの？ 始末する？」

田つきの悪い、不良系のほうが俺たちを脅すかのように言う。

「始末したいのはやまやまですけど・・・装備が悪いですわ。いいはいっただん引きましょう」

「つーか誰だよてめえら」

お嬢様系の言葉のすぐ後を追うように水色が低い声で言った。

「誰でもいいーだろしやべんな水色」

不良系が悪態をついた。

「何で俺の名前・・・」

水色が困惑したように田を泳がせる。

水色は1回も名乗っていない。なのに不良系は迷つこともなく水色の名を呼んだ。

超能力があるのか。

顔を見ただけで名前がわかるのか。

知っていたのか？

ならば何故・・・

困惑する俺たちに不良系はサラリと言った。

「あ、それ名前だったんだ。あたしは髪の色の」と言つたんだけど
水色はすつこけた。

「で、結局お前らは何者なんだよ」

俺は水色を立たせながら2人の少女を睨んだ。
2人はどちらも口を開く様子は見られない。

「・・・答える

それでもやはり口は開かない。

紫色の瞳で晒す。

「答えろっつってんだろ」

思わず怒鳴った俺に2人は顔を見合させて、それからなにやらつぶやき始めた。

それは唄のようで、呪文のようで、詩のようで、ただの詞のようだ
じふだった。

闇夜の音のない広場で風にのせるように響く2つの旋律は耳に心地よく残る。

髪が、服が、わずかに青く光りながら浮かび上がる。
俺も、水色たちも時じがとまつたかのように動かない。
いや、動けないんだ。

目でその光景を見、耳でその言葉を聞くことしかできない。

そのうち2人の身体が青白い光に包まれはじめた。

闇のどこにもないのに辺りから光を集めるように、2人は光を取り込んでいく。

そして

パキンという音と一緒に

光は大きく破裂するよつに大きく光った。

あたし小狼しゃおらん

私は小鳴しゃおめいですわ

風が運んだように耳元で聞こえた声。

それが名前をつけた言葉だと脳が理解したのは光も消え、2人の姿も消えてからのことだった。

俺たちは立ちすくんでいた。

あれが魔法による空間移動だということはすぐにわかった。なのにどうも納得いかない。

魔法を攻撃手段としている者にはわかる、魔力のオーラといつものがあの2人からは発せられていなかつた。

魔力がほとんどないのか？

だが空間魔法は中級魔法だ。魔力がほとんどないのなら使えるはずがない。

ならば考えられるのは委託だが・・・

委託はするほうが相当な魔力をもつていなければできないことだ。
俺も魔法委託をすれば3日は寝込むだろう。

首筋を冷や汗が流れた。

「おーい良ちゃんたちーっ」

鈴音の声にハッと頭を上げた。

水色たちも声のほうを向く。

鈴音は大きな木下で両手を振っていた。

「女の子救出したよー」

「そうだ女の子っ！」

夏澄がはつとして鈴音のほうに向かって走り出す。俺たちもその後を続いた。

女の子は闇の色を書き集めてそのまま絹糸に塗りつけたような髪の色をしていた。

瞳は雨上がりの空色。肌は夜の中でもほつきわかるほどの白色。
だが病弱というかんじではない。

「擦り傷とかはあったけど特に目立った外傷はないだよ」

鈴音が女の子のひざにバンソウコウを貼りながら俺たちのほうを見た。

そんなことはどうでもよかつた。

「あの、助けていただいてありがとうございます」

女の子は夏澄たちに向かって頭を下げる。

「いやいや、大丈夫だった？」

夏澄がそう言つと、女の子は照れたように頬を薄く染まらせ、うなずいた。

そして俺のほうを向くと、にっこり笑った。

「ありがとう、良太」

夜風がザワつと木々を鳴らした。

第4章～誰だつー～（後書き）

嘘八百です。魔法関連については信用しないでください。

感想評価等いただければとても嬉しいです。次話へのエネルギーになります。

あなたさえよければまた。三沢でした。

第5章／丁重に扱え――

俺と、佐祐と、まおら。

学生時代の仲良しグループ。

もう一人女子がいたような気もするが、とにかく仲がよかつた。
お昼を食べるのも、放課後遊ぶときも、いつも一緒だった。

俺はまおらが好きだった。

俺とまおらは好敵手でもあった。
首席を争う、そんな関係でもあった。
テスト前には2人で図書館に行つた。
だから俺はテストが好きだった。

そのうち4人でいるときもまおらといふようになつた。

知識量が同じぐらいだから、話も合つた。
楽しい、と。感じることが増えた。

いつだつたかそういう関係になつて
恋人という間柄になつて

数年後にまおらは突然姿を消した。

そのままおいらが今田の前にいる。

「久しぶりだね」

そう言つてまおらは笑つた。

黒い、闇だけを集めて絹に染めたような髪と。夏の爽やかな空を思わせる瞳と。輝石の輝きをもつ肌と。全てがまつたく変わつていなかつた。

俺はただ、呆然としていた。

「え、何！？なになになに？」

鈴音が俺の服のすそを引っ張つて言つた。

俺とまおらの微妙な空気を読み取つたのか。

それとも俺の表情が硬かつたからなのか。

水色も、夏澄も、わけがわからないといつ表情で俺とまおらを見比べている。

ただ、佐祐だけがあちやー、といつよつな顔で俺を見ていた。それから、一步前に出て口を開いた。

「良太の元力ノ」

言わなくてもいい一言を・・・

そう思つたが他にどう説明すればいいのかわからなかつた。

「え、良太彼女いたの！？」

と、夏澄が驚きの声をあげるし、

「へーかわいー」

と、水色がまじまじとまおらを見るし、

「名前なんてゆーの？何歳？」

と、鈴音が俺の服のすそを離してまおらに飛びつく。
まおらはわりとパニック氣味だった。

「え、えっと・・・」

救いを求めるみづ、まありは俺のまつをひきひつと見た。
空色の皿でこいつ皿つしている。

びひじみづ、と。

俺はため息をついた。

「東山吹まおら。俺と同じ年」

「そんでも俺らと違つて纖細で壊れやすいから丁重に扱えよ
佐祐が後付をする。

鈴音を中心て、軽い皿口紹介しきが始まった。

第6章～話を聞く～

殺風景な部屋。

必要な家具と、隅っこにある多量の本だけしかこの部屋にはない。

見慣れた部屋。

住み慣れた部屋。

ただ、ソファにちょこっと座つてうつむいているおいらの存在だけが見慣れなかつた。

1人でいるのは危険だから、と。

鈴音に言われて俺は仕方なくおいらを連れて帰つた。
まあ俺も色々聞きたいことがあつたから丁度よかつたとも思ひ。
コーヒーを渡して俺はテーブルを挟んでソファの正面にあるベッドに座つた。

そう。

聞きたいことは色々ある。

たくさんある。

ありすぎてどれから聞けばいいのかわからないが

とりあえずコレから聞くべきだらう。

「あーつひ、何？」

小狼と名乗った金髪の田つき最悪不良系の女と
小鳴と名乗った黒髪のおつとりお嬢様系の女。

名前の響きからして清虚の奴らだね。

そんな奴らがまおらを困む理由がわからない。手には武器を持つていたから殺すつもりだったか・・・

納得いかないことは納得するまで調べる。それが俺の楽しみだ。

だが待てど暮らせりでまおらの口から答えは出でこない。

ただうつむいて、膝の上できゅっと手を握っているだけだ。

「・・・・まおら?」

名前を呼んでも返事はない。

「まおら、ひづ」

「何でもない」

俺の言葉を途中で打ち切って、まおらは突然叫んだ。

何でもないから、と何度もつぶやいてい。

が、その様子は尋常じやなかつた。

握った拳はぶるぶる震えていて、うつむいた額からは何粒もの汗が零れ落ちている。

「うわ」とのようになんでもないと繰り返しつぶやいてくる。

「何でもなくないだろ?」

びくっと身体をはねさせて、まおらは探りいれるように聞いた俺の顔を一瞬だけ見た。

すぐにまたうつむいてしまつたが、一瞬見たまおらの表情はやつままでのものとは全く違つた。

明らかに変だ。

絶対何かある。

だがまおらの様子から見て決して話してはくれなさそうだ。

仕方がないから俺は遠まわしに断片的に聞いていくことにした。

单刀直入に聞くのを避けねば少しでも何かしゃべってくれるかもしない。

コーヒーを一口飲んで気を落ち着かせる。

それからまだ尋常じやない様子を見せてくるまおらにコーヒーを飲むように促して、気を落ち着かせた。

一気に「コーヒー」を飲んでから、まおひらはふつと息をつく。

「落ち着いたか？」

首を立ててふつて、まおひらは俺を上田で見てきた。

「あの、『じめんね』

「何が？」

何のことがだかわからなくて聞き返した俺を眺めて、空の皿を少し潤ませて。

唇を少しだけ噛んで、それからまおひらは口を開く。

「危ない田にあわせちやつて」

一回そこで言葉を切つて、それから

「ちゃんと全部説明するのが道理だよね」と付け足した。

どうやら話してくれる気になつたらしい。

空になつた「コーヒーカップ」をまおひらから受け取つて再び「コーヒー」を入れなおす。

それからまおひらに向き直つて、俺はこつこつ笑つた。

「嘘偽りなく、できれば全部話してね

まおひらは小さくつむぎいた。

第6章～話を聞く～（後書き）

ずいぶん遅くなりましたが続きです。

それにしても短い・・・。

次回からはもう少し長くします。

感想等もらえたうれしいです。次話製作のエネルギーになります。

あなたさえよければまた。三沢でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5126a/>

王国物語

2010年10月10日01時04分発行